積み	かもめ	四坐	あぶっ	カプ	老眼鏡	恋	箱根心	二期	梅雨	菩	]1]	潮	遠お	
木	α)	古八苦	んの	ノセル田	のあ	人	心中	咲き		薩	37	騒	首和	目
275	253	237	雪	男	る喫茶店	165	119	桜	95	55		23	5	次

## 遠お音ね

ような視線を向け、 むという天気予報は当たった。 足早に歩いている男の前で、 杉山さんだって、お元気だったのに、突然ああいうふうになられたのよと不満げに言 冬の風が舞い上がった。男は立ち止まり、つむじ風を目で追った。冷え込 出かける前に、 妻はマフラーを持ち出したが男は拒んだ。彼女は一瞬訝る

草も止めたし、休日には散歩を始めたと言っていた。その男が同僚と酒を飲み、 杉山という男は、 一月前、突然、脳出血で倒れ意識が戻らなかった。以前から血圧が高いのを気にし煙 店を出た途端に倒れた。

四十七歳だった。

も悪い時もあるのに、女房が世間体ばかり気にしていると硬張った笑いを浮かべた。 倒れる三日前にも男は一緒に飲んだ。証券会社に勤める相手は、景気が悪いということを喋り、

時

自嘲気味に言った。 まり、 男は相づちを打ち酒を飲んだが、ぼんやりとした不安を抱き、同じ年齢の相手を見た。髪には白髪が集 頼から顎にかけ脂肪がついていた。見返した友人の視線に戸惑ったが、 彼はお互いになと応えたが、笑いになりきれなかった。 相手は、もういい歳だろと

のか、 が落ち着いた。男はその相手が死んだと聞いた時には、にわかに信じられなかった。他人ごとと思えない ふたりは幼なじみで年に二、三度会い酒を飲んだ。会っても家族のことや近況を話すだけだったが、心 妻は気にかけるようになり、首元は温かくしたほうがいいと言い出した。そんな言葉を男は煩わし

く感じた。

もおかしくて笑っている間に、だんだんと恐くなってきて、泣きだしそうになったところで目が醒めたと 見たの。わたしが小錦のように太って、この玄関から出られないで焦っているの。不気味でしょ。自分で それから妻は笑った。その笑い方が唐突だったので、気色悪くなりどうしたと訊いた。昨日、変な夢を

ださいね、という妻の言葉に返答をせず家を後にした。 ねと視線を向けた。老いは死んだ友人だけではなく、自分たちにも忍び込んでいる。本当に気をつけてく 男は少しずつふくよかになっている妻の顔を改めて見直した。わたしたちももうとっくにい 歳なのよ

言った。

生き死にとはなんなのかと考えるが、それは妻も同じことのようだった。 よね、と呟いた妻の声が耳の奥でする。確かにそうだと思う。身近に接していた人間が突然に死ぬ。 つむじ風はビルの壁に当たり消えた。男はコートの衿を立てた。人は本当にいつ死ぬのかわからないの

木に、イルミネーションが点滅を繰り返している。男は腕時計を見る。一時にはまだ間がある。少し早か た女の声が、 遠くでサイレンの音がし、目を上げると、消防車が師走の町を走り抜けた。ショーウインドウの模造の 待ち合わせの喫茶店に目を向けた。 木枯らしに乗って聞こえてくる。 会う時はいつも抱いてくださいね、と訴えるように囁

大きく変わってしまうもんなのさ。そう思わないか。死んだ友人はそう言って、重いため息をついた。そ 人生はなにがあるかわからないんだよな、魔がさすということがあるだろ。ほんのちょっとしたことで

の息の大きさに自分でも気づき口元をゆるめた。

な返答もできず、 友人は、 黙って聞いていた。 若い女の蜘蛛の巣にかかったみたいだよ、と言いながら相談を持ちかけた。 相手は喋ると気が楽になったのか、 おまえだっていつそうなるかわ

からないんだぞ、と煙草の煙に目をしょぼつかせた。

火がついちまったよ、と言った友人の息苦しそうな顔が浮かんだ。 性を目にしたが、あの女のせいで寿命を縮めたのではないか。別れたと思ったのに、 まさかと男は笑ったが、その言葉が近頃は頭の隅にこびりついている。葬儀の日、涙をこらえていた女 またやけぼっくいに

つかせている姿が見える。いつも、いつもですよと言う、女の声が頭の中に響き合うように広がり、 の男の当惑と哀しみがわかる気もするが、今は自分がその中にいる。蜘蛛の巣にかかった虫が、羽をばた よく似ているな、と男は言葉を口にしてみた。込み上げてくる苦い感情と一緒に弱い笑みが洩れる。

言う自分の声が聞こえてくる。それから一年かと、あの頃の友人と同じように重い息を吐いた。 替えになにを摑んだのかと男は考える。おれはそこまでの決心をしているのかとためらうが、い さと友人は言った。どんなことになっても同情はいらないからな、と言っていた相手は死んだ。死と引き ものだとわかっていても、 戸惑いとは別のあまい陶酔を甘受する。 男と女しかいないんだぜ、それなのに悩んだり、ため息をついたりして生きている。 突き進むだろ? おれにそんな活力が残っていただけでも、 未来が芳しくない

項が見えた。まだ二十代の半ばに見える女の喪服姿はぎこちなく感じた。 た寿司を頰張り続けた。ビールがなくなると注文し、気忙しく自分でカップに注ぎ飲み干した。白く細い 洋菓子店の窓際で目を腫らしケーキを食べていた。彼はその光景を見ていた。女はケーキを食べ、コー 別れたが、その不自然さに男はふたりの確執の深さを知った。駅までやってくると、喪服姿の若い女性は、 ずに泣く妻と女は、 を飲み干すと店を出て、 の日、唇を震わせている友人の妻のそばで、声を殺して泣いている女がいた。おたがいに声を上げ なにを堪えているのだろうと不思議な心持ちで見ていた。彼女たちは目も合わさずに 駅に向かわず近くの寿司屋に入った。男がつられるように入ると、 女は握られ

教えたのかと考えた。 ルを差し出すと、 男は急に愉快になりにやついた。友人の死が哀しみとして受け取れず、 女はまた飲んだ。なにもかも仕込んでいくのが愉しいと言った友人は、 滑稽に思えたのだ。 酒の飲み方まで 板前がビー

動させたところで信号が変わった。若い運転手は嫌がらせの警笛を激しく鳴らした。女は乗用車から降り、 クがしつこく警笛を鳴らし、なにをしているんだよと怒鳴り声を上げる。女の顔はひきつってい 配 クの運転手は馬鹿野郎と罵り、 |の女の乗用車が故障していた。女は幾度となくエンジンをかけようとするがかからない。 警笛が鳴り目を上げると、信号が変わった。エンジントラブルでも起こしたのか、横断歩道の前で、年 後続の乗用車に右手を上げ迂回しようとする。 トラックを隣 後続のトラッ め 車 線 トラ

トランクを開けて赤い旗を取り出した。それから携帯電話でどこかに連絡を取っていた。

心に火をつけた。たとえ叶えられない関係だとわかっていても、突き進んでいる姿が、今までの自分とは のうちに意識し、自分もそう思い込んでいた。そしてその殼が破れた。背徳だという気持ちが一層自分の とよく似ていると思った。いやそれ以上の心の疼きがある。歳を重ね、分別のある人間だと知らず知らず はもう一度時計を見る。まだ十五分もある。彼は頰をゆるめた。遠い昔、異性を意識し始めた頃の気持ち 男は街を眺めた。そんな余裕などこの数年、一度としてなかったのに、そうできる自分の変化が面映 みんなあいつのせいかもしれないと思うと、体の奥底から熱いものが込み上げてくる。 男

違うように見えた

葉が、心の隅に残っていたのかもしれない。 があった。このままの人生でいいのか。そういう問いが絶えず頭をもたげてきた。あるいは死んだ男の言 えていた。 な時でも踏みださず、むしろ尻込みした。踏み越える勇気もなかったし、自分には関係のないことだと考 でも思う。波風の立たない生き方を望んでいた。若い女性と知り合う機会がなかったとは言わない。そん 真面目だけがあなたのいいところよ、と見下したように言った妻の顔がよぎる。そうかもしれないと今 平穏な人生で終わるだろうと思い込んでいたが、先々のことが見えてくると逆に当惑するもの

吐いたが、あの言葉は本気だったのだろうか。そして自分が今、あの男とよく似た環境の中にいると考え もう行き着くところまで行くかもしれないな、と友人は気弱な笑みを浮かべながら、妙に力強い言葉を

薄ら寒いものを感じることがある。

恋人

は一度はこどもを生ませてやりたかったという気持ちがあり、犬に見つめられるといまでも責められてい れても別れてしまうことになるんですから、もっとかわいそうですよと妻は詰るように言った。わたしに から戻ってくると、しきりに縫合した部分を舐めていたが、わたしは残酷なことをしたという気持ちにな なでた。そこには二歳の頃の避妊手術の痕があり、肉がみみず腫れのように赤く盛り上がってい っていた。しかたがないわよ、さかりのついた牡犬は鎖を切ってもやってくるというでしょ。仔犬が生ま 六歳になる牝犬が縁台に上がり、白い腹部を見せて寝そべっている。わたしは彼女のやわらか い腹部を 病院

りかわいがっていたが、その妻は一年前に子宮癌で死んだ。犬のおなかを切ってしまったから、罰があた 柴犬はおとなしい。妻が六年前に近くの公園から拾ってきた。日に二度の散歩と、丹念にブラシがけをや 陽射しはやわらかだ。空気もふくらんでいる。春だなとつぶやくと、犬がわたしの指先を舐め上げた。

る気がする。

「どうするか。おまえも行くか」

ったと弱々しくわらってい

ておくか。そうつぶやいて立ち上がると、相手も一緒に起き上がって催促するように尻尾を振った。 この頃のわたしはよく犬に声をかけている。連れて行ってもなあ。退屈するばかりだから、留守番をし

きあってくれと言ってきた。もっと若い男性と行ったほうがいいと応じると、誘う者がいないのだと応え 縁側でぼんやりとしていると、尚美から電話が入り、阿蘇山までドライブをしたいのでつ

とを羨ましがっているわよ。尚美は途切れた言葉のあとに付け加えるように言った。 から小さな胸騒ぎを覚えていた。どうして阿蘇なのか。ためらわせるものがあった。みんなおじさんのこ 明るい声だったが緊張しているようにも感じられた。それで思わず承諾してしまったが、わたしは朝

が う決めると心も落ち着いた。同僚たちにはいい身分だとからかわれたが、確かに彼らが言うようにこども なにも無理をして働くこともないという気持ちにもなった。あくせくせずゆったりと生きたい。早期退職 気持ちになった。妻との間にはこどももいなかったし彼女も亡くなった。人の死などあっけないものだ。 の割増金をもらい、ひとりで生きていくだけの貯えもある。なんとかならなければその時はその時だ。そ いたら、こんなこともできなかったはずだ。 わたしは一年前に勤めていた電鉄会社を辞めた。定年退職までまだ八年もあったが、もう十分だという

思いもあったが、 りこどもがほしかったのではないかという気がした。病院に行き、最善の手当てをすればよかったかと後 な家庭だったが、死ぬ間際になると、犬のことばかりを気にしていた。その言葉を耳にするたびに、 2の念もわいたが後の祭りだ。おたがいが強くそうすることも願わなかったし、為すがままでい わたしは仏壇の前に立ち妻の遺影をながめた。いつもの目と違い射るような視線だ。 今頃になって、これでよかったのかという思いが払拭できない。 ふたりだけの静か

一今朝になると、 尚美を待っていると途中から連絡が入り、受話器の向こうからすまなそうな声が届いた。わたしが家の なんだかおじさんに悪い気がしてきたわ」

## 佐藤洋二郎 (さとう・ようじろう)

1949 年福岡生まれ。作家。日本大学芸術学部教授。中央大学卒業。25歳の時、『三田文學』にはじめての小説「湿地」を投稿し掲載され作家の道へ。外国人労働者をはじめて文学に取り入れた『河口へ』(集英社)で注目され、人間の生きる哀しみと孤独をテーマに作品を発表。『神名火』(小学館文庫)、『坂物語』(講談社)、『沈黙の神々』1-2、『親鸞 既往は咎めず』(共に松柏社)、『忍土』(幻戯書房)、『妻籠め』(小学館)など多数。『夏至祭』第17回野間文芸新人賞、『岬の蛍』第49回芸術選獎新人賞、『イギリス山』第5回木山捷平文学賞。現在、日本文藝家協会常務理事、日本近代文学館常務理事、日中文化交流協会常任理事、舟橋聖一文学賞選考委員、日大文芸賞選考委員、『季刊文科』編集委員など。

## 佐藤洋二郎小説選集二「カプセル男」

2019 年 10 月 20 日 初版第 1 刷印刷 2019 年 10 月 30 日 初版第 1 刷発行

著者 佐藤洋二郎 発行人 森下紀夫

発行所 論 創 社

光117月 诫 剧 红

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀/奥定泰之

印刷・製本/中央精版印刷

組版/フレックスアート

ISBN 978-4-8460-1822-1 © Youjiro Sato 2019, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。